

『インドネシアへようこそ』作成報告

エフィ ルシアナ・山下美紀・森本由佳子

1. はじめに

国際交流基金ジャカルタ日本文化センター（以下「センター」とする）では、インドネシア国家教育省専門中等教育局（以下「教育省」とする）との共同プロジェクトとして、2001年から、専門高校観光部門観光サービス業務専攻用の日本語教科書作成を最終目標とする教材開発に着手した。本教科書は2003年に試用版ができ、1年の試用期間を経て、2005年に完成した。本稿では、本教科書の作成過程及び教科書の特徴について述べる。

2. 教材作成の背景

インドネシアの高校には普通高校、宗教高校、専門高校の3種類がある。専門高校は、卒業後すぐに社会に出て使えるような専門知識や技術を身に付けるための高校で、国家教育省専門中等教育局が管轄しており、同局がナショナル・カリキュラム⁽¹⁾の作成も行っている。

ナショナル・カリキュラムでは外国語科目として英語が第一外国語となっており、第二外国語は原則として日本語・ドイツ語・フランス語・中国語からの選択と定められている。ただし、第二外国語が必修科目とされているのは、観光部門観光サービス業務専攻のコースのみである。

1999年にカリキュラムが改訂され（以下「1999年カリキュラム」とする）外国語教育においてはコミュニケーション能力を伸ばすことを目指し、場面・話題・機能シラバスが取り入れられた。その後、「1999年カリキュラム」が部分修正された「2004年カリキュラム」が導入された。概要は以下の通りである（表1）。

表1 カリキュラムの概要

	「1999年カリキュラム」(2000年施行)	「2004年カリキュラム」(2005年施行)
学習年次	高校2年生、3年生	自由（高校1年生から可能）
総学習時間数	184時間	330時間
シラバス	場面・話題・機能シラバス	場面・話題・機能シラバス
言語能力	会話能力重視	会話能力重視
文字	ひらがな・カタカナの読みのみ 漢字は学習しない	ひらがな・カタカナの読み書き 漢字は学習しない

観光サービス業務専攻の日本語科目では、「1999年カリキュラム」施行時にはその目的に適した教材がなく、各教師が自主教材や一般の日本語教科書を使用して授業を行っていた。しかし、教師の日本語力があまり高くなくコミュニケーションな教授法を学んだ経験がないため目的に即した授業運営が難しい、また多忙であるために観光サービス業務専攻のコース内容に沿った自主教材の作成に時間が割けない等の問題が見られた。それらの問題を解決するために、経験の浅い教師や日本語力のあまり高くない教師でもすぐに使え、効果的な学習が望める教材が必要とされていた。

3. 観光サービス業務専攻用日本語教科書の作成過程

3.1 作成プロジェクト全体の流れ

「1999年カリキュラム」に準拠した教材を開発するため、2001年に、教育省とセンターとが共同で「専門高校用日本語教材開発プロジェクト」を約5ヵ年計画(2001年2月～2005年6月)で開始することになり、以下のような段階を踏んで教科書が作成されることになった。各段階の作業内容は以下の通りである。

第1段階<到達目標の設定>(2001年2月～3月:「到達目標」完成)

カリキュラムには学習すべき項目(例えば、「値段、電話番号、部屋番号、年月日、時間、曜日について知らせる」など)の記述があるが、生徒が何ができるようになることを目指すのか、というコミュニケーション上の到達目標は明記されていなかった。そのため、ジャカルタ及び周辺地域担当であった青年日本語教師²⁾の配属された専門高校でのチームティーチングの実践をもとに、センター側がコミュニケーション上の到達目標を検討し設定した。

第2段階<『シラバス』の作成>(2001年2月～4月:『シラバス』完成)

専門高校教師5名とセンター講師、青年日本語教師から成る教材作成委員を決定。第1段階で設定した到達目標に基づいて、具体的な場面と役割を設定したモデル会話を作成し、必要な語彙、文型、表現を抽出した。これらにコミュニケーション上の注意点も加え、『シラバス』とした。

第3段階<『素材集』の作成>(2001年5月～2002年3月:『素材集』完成)

上記で作成した『シラバス』に基づき、教室活動が行えるよう、例文、文型に品詞や活用を記入したものと代入語彙例、モデル会話の代入練習等を加え、『素材集』とした。

第4段階<教科書の作成>(2002年4月～2005年6月:教科書完成)

上記の『素材集』を教科書の体裁に整えた。2003年4月に試用版が完成し、2003年度³⁾に教材作成委員所属機関を対象に試用を行った。2004年度には試用版の評価・修正を経て、教科書『インドネシアへようこそ』が完成した。

第5段階<教科書の広報>

教科書の配布方法については、教育省と協議の結果、近年の地方分権化の流れから、販売という形をとることになり、教科書をより多くの学校で効果的に使用してもらうために2005年6月に発売記念発表説明会を開催し、ジャカルタ及び周辺地域の専門高校日本語教師、学校長、及び教育省関係者を招き、作成経緯や使用方法を説明した。また、ラジオ局や新聞社等マスメディアにも取り上げてもらい、より大きな波及効果を狙った。

以下、第4段階の教科書作成に焦点を当てて報告する。

3.2 教科書の作成

3.2.1 教材作成委員

本教科書の主な作成委員は以下の通りである。

- (1) 国際交流基金ジャカルタ日本文化センター派遣専門家2名及び青年日本語教師1名（常時3名、着任・帰任により交替）、インドネシア人専任講師1名
- (2) ジャカルタ及び周辺地域のインドネシア人専門高校日本語教師2~4名（途中、2名が日本留学及び浦和短期研修参加、なお『シラバス』及び『素材集』作成時の委員は5名）

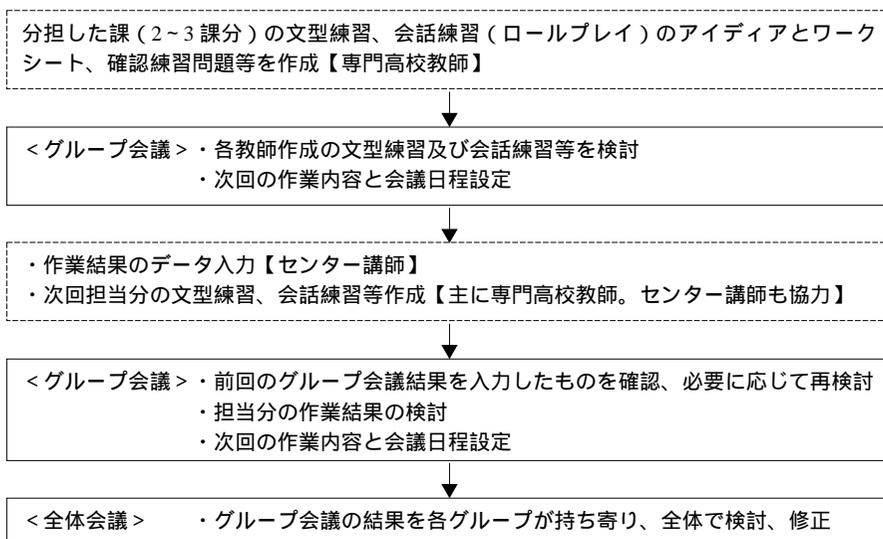
専門高校教師を教材作成委員とし、共同で作業を行った理由は、まず、現場に即した教材作りには現場の教師の意見・視点が必要であるため、また、共同作業を通して高校教師の教材開発能力を向上させることにより日本語教育の現地化を推進するためである。教材作成委員の選定にあたっては、ジャカルタ及び周辺地域の専門高校日本語教師の中から、比較的日本語力が高く、教授力もあり、教科書作成の意欲がある教師が選ばれた。

3.1で述べたプロジェクトの第2段階<『シラバス』の作成>以降、「専門高校教師1~2名+センター講師（青年日本語教師を含む）2名」から成る作業グループを2グループ結成し、執筆部分を分担した。なお、上記作成委員のほか、ジャカルタ及び周辺地域以外の地域に派遣されていた青年日本語教師も、直接執筆は担当しなかったが、専門高校訪問時の授業見学及び授業実施に基づくコメントや配属された専門高校での教科書試用版試用結果などをセンターにフィードバックするという形で作成に関わった。

3.2.2 作成作業

2002年3月に完成した『素材集』をもとに、センターの派遣専門家とインドネシア人専任講師が中心となって教科書の枠組み、課の構成、及び執筆基準等を整え、2002年7月より執筆作業を開始した。具体的な執筆作業は、教育現場をよく知る専門高校教師が中心となって進めた。2つの作業グループが全20課のうち10課ずつを担当し、グループごとに定期的に集まって作業を行い、さらに3ヶ月に1度程度の割合で全体会議を実施して検討を重ねた。

以下は、作成作業の基本的な流れである。実線枠内は会議での作業内容、点線枠内は次の会議までの各自の作業、【 】は主な担当者を示す。



作成作業は上記のように、個人作業 グループ会議で検討 個人作業という形で行われた。グループ会議は3週間に1度ぐらいの割合で実施されたが、月に2~3度集まることもあった。このような過程を経て試用版が作成され、1年間の試用期間を経て、修正作業に入った。修正作業は主に課の流れの組みかえやイラストの変更、ロールプレイの説明の加筆・訂正などであったが、作業途中に「2004年カリキュラム」が導入され、総学習時間数や文字の扱いに変更があったため、課の提出順序を組み直したり会話練習を新たに追加⁴⁾したりする必要も生じた。

4. 教科書について

本教科書は「2004年カリキュラム」準拠で、場面・話題シラバスを採用している。語彙及び文型は日本語能力試験4級レベルのものを中心に採用し、インドネシアの地名や観光地など観光に関する語彙も取り入れた。対象は、専門高校観光部門観光サービス業務専攻の日本語学習者であるが、専門高校ホテル業務専攻の日本語科目の副教材としても使用可能である。

4.1 特徴

特徴としては、教授経験の浅い教師への配慮、観光サービス業務専攻のコース内容への配慮の2点があげられる。

まず1点目であるが、日本語力のあまり高くない教師や教授経験の浅い教師でも使えるように、教科書の流れに沿って順番に教えていけば良いように一課の流れを構成し、さらに、前書き部分に授業例を提示して、導入から会話練習までの授業の進め方を詳しく説明した。各課のはじめには導入質問・基本会話を提示し、何のために学習するのか、学習後にどんなことができるようになるのかを学習者及び教師に意識・理解させやすくした。また、会話練習には必ず場面設定をつ

け、練習で使用するワークシートの例を示すことにより、練習方法がわかりやすくなるよう心がけた。

2点目として、各課に観光の際に実際に出会う場面の会話を提示し、課が進むごとに、客の迎え、ホテルのチェックイン、ツアーの予約、ツアー中の説明、空港での見送りというように旅行日程に沿って場面が進行するようにした。また、実際にジャカルタ市内のホテルや旅行会社で撮影した写真、豊富なイラストを入れて場面をイメージしやすくした。言語的な面だけでなく、ガイドの立ち方や姿勢、日本人の姓名などについての文化的な面も紹介している。

本教科書の作成は、センターを拠点とし、先述したようにジャカルタ及び周辺地域の専門高校教師を作成委員に招き作業を進めたため、教科書に提出される観光地名などはジャカルタ周辺のものが多いが、これはあくまでも例とし、他地域で使用する場合にはその地域での名所や名物の名前を使用して練習するように随所に注意書きを加え、どの地域でも使えるように配慮した。

4.2 構成

全20課(表2)から成っておりB5版2分冊である。本冊1(全104ページ)はローマ字表記、本冊2(全120ページ)はかな表記となっている。これは本冊1でかなが導入されるためである。他に基本会話と会話練習の会話例が収録された音声テープ1本が付属している。

各課は、課の目標、導入のための質問、基本会話、新出語彙・文型の基本練習、会話練習、確認練習問題、という流れで構成されている⁽⁵⁾。

表2 『インドネシアへようこそ』の目次

本冊1		本冊2	
第1課 日本語の音	第7課 カタカナ	第12課 電話	第16課 観光地(1)
第2課 あいさつと自己紹介	第8課 ものの値段	第13課 天気と天候	第17課 観光地(2)
第3課 ひらがな	第9課 旅行の日程	第14課 飛行機の チケット予約	第18課 パッケージツアー
第4課 お客の名前	第10課 旅行の所要時間		第19課 ガイド業務(1)
第5課 電話番号	第11課 観光地のスケジュール	第15課 ホテルの予約	第20課 ガイド業務(2)
第6課 部屋番号	(インドネシア語の目次をもとに日本語訳)		

5. 成果と課題

以上、専門高校観光部門観光サービス業務専攻用日本語教科書『インドネシアへようこそ』作成プロジェクトについて報告した。最後に、本プロジェクトの成果と今後の課題について述べたい。

成果としてはまず、第二外国語が必修科目となっている観光部門観光サービス業務専攻の目的に沿った教科書が完成したという点があげられる。これまでは専攻内容に合った日本語教科書がなく、何を使うかは各教師の裁量に任されていたが、基礎的な日本語を学習しながら観光業務に

関する表現なども身に付けることができる教材を提供できたと言えるだろう。実際に本教材を使用している専門高校教師からは、「観光場面で実際にある会話が学べ、生徒にとって役に立つ」「学習項目が順番に並べられているので教えやすい」「情報量が多く、便利だ」等の声が上がっている。

また、成果の二つ目として、教材作成委員となった専門高校日本語教師の成長があげられる。本プロジェクトは約5年という長期にわたるプロジェクトであったが、専門高校教師が中心となって執筆作業を進め、プロジェクト最終段階に実施した教科書の発売記念発表説明会でも進行、説明、モデル授業を担当した。インドネシアの専門高校教師は給与等の待遇があまり良くないため、複数校を掛け持ちで教えている場合が多く、作成委員も例外ではなかったが、熱心に教材作成に取り組み、さまざまなアイデアを提供してくれた。また、教育省とセンターと共催で実施している専門高校教師研修の際に講師役としてモデル授業や教材説明を担当するなど、本プロジェクトを通して彼ら自身も教師としての成長を遂げたと言える。

今後の課題としては、本教材の普及活動があげられる。全国レベルでは、今後実施される教育省とセンター共催の教師研修において、本教科書を使用した教室活動のやり方を扱っていくことになる。また、地域レベルにおいては、ジャカルタではプロジェクト最終段階でセンターが中心となって説明会を実施したが、ジャカルタ以外の地域では、今後、各地のジュニア専門家の活動や専門高校日本語教師会の活動を通して普及を図っていくことが必要である。具体的には、教師会が実施する勉強会で本教科書の使用方法の説明や模擬授業を行い、その後ジュニア専門家が学校訪問等を通してフォローしていくという方法が考えられる。

〔注〕

- (1) インドネシアの初等教育・中等教育においては、国家教育省の各管轄部署によって教科ごとにナショナル・カリキュラムが作成されており、約10年に1度、改訂が行われている。
- (2) 「青年日本語教師」という名称は2005年4月より「ジュニア専門家」に改称されたが、本稿では、本プロジェクトに青年日本語教師が関わった期間が長かったことから、「青年日本語教師」という名称を使用する。
- (3) インドネシアの学校年度は7月開始である。よって2003年度は2003年7月から2004年6月までである。
- (4) 「2004年カリキュラム」導入に伴い、ひらがな・カタカナの書き練習を追加し、後半部分をローマ字表記からかな表記に変更した。また、ホテル業務専攻の学習者でも使えるようなホテル場面の会話、語彙を追加した。
- (5) 課の構成については、山下(2005)を参照されたい。

〔参考文献〕

- スジアント・小林佳代子(2004)「インドネシアの高等学校における日本語教育のカリキュラム」『世界の日本語教育 日本語教育事情報告編』第7号、59-70
- 山下美紀(2005)「インドネシアの専門高校観光部門観光・サービス業務専攻用日本語教科書『インドネシアへようこそ』の開発」『日本語教育通信』第53号、4-5、国際交流基金